

報告一 近畿村落の変動

— 松本通晴『農村変動の研究』

(一九九〇)をとおして—

松本通晴

本年の村落社会研究会の共通課題に依えて、筆者の『農村変動の研究』を要約することはむずかしい。筆者の研究は、戦後の農村変動の過程を、一つに、伝統的諸要因と関連づけ、第二に、地域社会の形成という農村都市の再編成の中で位置づけることに集中しているからである。

(1)戦後四〇年の中で、近畿の村落を個別の事例として取り上げてきた研究は数多い。しかし、近畿の村落の研究を、一つの研究史として組織的に整理したところみはいままでになかったし、近畿の村落を、その村落の実態にふれて、全域にわたって調査したこともなかった。筆者の近畿村落研究は一つに、それらの点を明らかにし、

整理したことがある。

近畿村落研究史をたどると、わが国の村落研究のそれぞれの画期に、近畿村落もまた、その研究の対象として選ばれてきたことがわかる。しかしそこには、研究の集中に関して著しい波動が見られた。戦後の一九五〇年から七〇年までの間は、戦後民主化と、高度経済成長の中で、村落の変動が主要課題としてあり、そのために研究が精力的に注がれ、そして多くの成果も生み出されていった。

他方、一九七〇年から九〇年までは、右の状況と課題が通過して、研究の上で、大きな落差が生ずることになった。それは、わが国の村落研究上の共通した傾向であり、独り近畿村落研究史上の事柄とはいえないのかもしれない。すなわち村落研究の今日の意義がきびく問われ、同時に、農村再編成原理が模索されているためである。

その上に、近畿村落研究に関しては、いままで明らかにされてきた、近畿の経済的先進性に対して、近畿の伝統的社会構成がどう関係づけられるのかについて、社会学の側から十分に解明できていなかったことも、停滞をもたらした一因なのかもしれない。また、全国に先立つ近畿の都市形成にもかかわらず、都市と農村の諸関連が、研究上看過されてきたことも、研究焦点を曖昧にしてきた理由なのかもしれない。

(2) いままで、近畿の村落の社会構造を特徴づける要因として、いくつかのものが挙示されてきた。その一つが宮座であり、第二に株なし株内であり、第三に親方どりの慣行であり、第四に講組結合である。しかし、これらについては、いずれも戦後に近畿の村落の全域にわたって、その存在が再確認されることはなかった。それらの要因は今日にも村落の中に発見できるのであろうか。

まず、宮座について、一九七九年と八一年に、近畿の南部地方の村落三一八三(旧大字)にたいして、筆者は郵送調査で宮座の存否を問うた。従来、この地方は、村落に宮座が濃厚に存在していると指摘されてきたところである。調査の結果では、滋賀県と奈良県の村落に株座と村座を含み、同時に、株座、村座も、その変動過程を表わしたが、それでも、宮座の存在は指摘できた。

村落の株と株内については、一九六八年に、近畿の北部の村落二一四五(旧大字)にたいして、また、一九七八年と八一年に、近畿の南部の村落三一八三(旧大字)にたいして、筆者は郵送調査でその存否を問うた。それによると、同族は一般に、近畿の北部の村落ではマキであり、株・株内であり、近畿の南部の村落ではイットウの名称で呼ばれた。しかもそれら三者の分布は截然と区別された。しかし、結合内容に関して、株と株内は株講、先祖講など、いくらか特質を残すが、マキとイットウは、すでに機能力において著しく劣っていた。

かつて、近畿の最北部の村落には、親方どりの慣行が見られた。戦前の地方誌には、そのことがしるされている。しかし、戦後の一九六八年の村落(旧大字)二一四五を対象としての親方子方慣行調査では、丹後地方(京都府下)を中心に、吉凶時の義理に根強く残るが、但馬地方(兵庫県下)では多く消滅してしまっている。

最後に、講組結合をとりあげる。「講中村」(鈴木栄太郎)や「講組結合」(福武直)の名称は、すでに早い時期に、近畿の周辺の村落を特徴づけて用いられてきたが、その実態については、いまままで組織的に明らかにされることがなかった。筆者は一九八一年に、近畿の村落(旧大字)の一部五九九(和歌山県)にたいして、その

存否と、その存在内容を郵送調査から問うた。それによると、講の存在はすべてにすべての村落に見られるというわけではないし、機能も弱かった。他方、組結合はほとんどの村落にあり、葬式を主要な機能としている。

以上、近畿の村落に特有な社会構造の諸要因について述べた。今日、村落の宮座は変質し、同族結合も機能を弱め、親方どりは消滅に向っている。他方、組結合はいまだその機能の存続を指摘することができる。しかし、これらの伝統的な社会構造の存続にたいして、戦後に一貫して農家および専業農家の減少、第二種兼業農家の増大という変動の基本線は、どう関連するのであろうか。少くとも、郵送調査結果から、この経済構造における変動のテンポに即して、伝統的な社会構造は変動するものとは思われなかった。伝統的な社会構造には、経済的変動に対応しうる能力を含んでいるからかもしれない。

(3)近畿の村落の個別研究は戦後に数多い。筆者もいくつかの村落を調査の対象としてきた。そのうちの三カ村は近畿の北部に属し、一カ村は最北部の村落である。これに対して、南部の村落は、二、三調査に入ったものの、報告書を提出するまでには至っていない。また、筆者の調査研究は、早期になされたもので、今日の共通課題に直接かかわるものでない。そのために、近畿村落の個別調査研究を通しての今日への問題提示はむずかしい。

京都府北桑田郡京北町旧山国十カ村は、京都から二時間の距離であるが、中世以来の山国木材産地として著名であり、また、維新期の山国隊出陣、それに山国旧名家の存在するところとしても広く知られている。ここでは、一九六〇年以降いちじるしい人口流出を

見せたが、旧山国村の林業経営、そして村落再編成はどう進行しているであろうか。今日の農村社会編成の実態は筆者によくわからぬ。

京都府亀岡市旧馬路村は、京都から一時間余の平地村であるが、近世以来の大村、そして郷土村落であったことから、そこには今も身分意識を存続させている。それは、複数の同姓集団(身分)の祭祀行事をとおして維持されてきた。ここでの村落再編成はこの身分(家格)意識を避けて通ることができない。

京都府綾部市十倉、測垣、安国寺の各旧村は、綾部市街地から一時間以内の距離にある。それぞれの村の上層農は、株講、先祖講を維持してきた。機能力は弱い、なお講行事は存続している。

京都府与謝郡野田川町亀山では、高齢者で親方子方慣行を残しているが、新しく親方どりをを行うことはすでにない。

右の四つの事例とも、いままでの近畿村落の構造的特徴をいくぶん見せている。しかし今後、これらの要因は地域再編成にどうかかわり、どう変動していくのかが、注目されるのである。

(4)最後に、今までの近畿村落研究から、今日に対して何が提起されるかについて、触れておきたい。①筆者の近畿村落の研究は、主要には、株(同族)の存在から、村落構造を特徴づけ、同時にその村落の変動を明らかにするところみであった。それによって、村落の伝統的社会構造が、今日の村落再編成にたいしてどう規定することになるのかについて、注目する必要があることを述べたのである。しかし、すでにここには、研究上の限界が見られる。②この限界を超えるものとして、筆者の瀬戸内村落の調査研究があった。工業化に伴って村落の変動はどう展開し、同時に、広域の地域社会を形成

することになるのか、また、工業化の影響（煙害）にたいして、農民はどう反対闘争を持続させたか、そして、その煙害反対闘争の中で指導者層（町村長）はどれほどまでに農村の自治と農業の復権を熱望したかについて、新しい資料の発見を通して追究してきた。ここでは、工業化による都市の再編成が、歴史的経緯の中で明確になったのである。

③さらに今日、つぎの諸点が考慮される必要があると思われる。現時点の国―地方（自治体）の枠組の検討、およびその中で方向づけられる地域活性化が、その自治体と農民にたいしていかなる意味をもって迫ってくるのか、すなわち自治体の活性化政策がどのように具体化され、またそれが、農民の意識のうえにも活性化を喚起してくれるのか、などの実態が明らかにされるのでなければならぬ。たとえば高知県下の「りばーふるさと」（四万十川流域）構想はその一例である。しかし、これらの地域活性化は今までの旧村とどうかわってくるのだろうか。それが、農民の個性と創意を実現することになっているのか。ここで、地域づくりの担い手をとりあげる必要がある。個性豊かな農民、想像力豊かな農民の生活史、ないしは生活史の交錯は、われわれにたいして新しく農民と農村の研究へと誘う一要因となるかもしれないからである。